

Member

Associate Professor 伊藤香織

M 2	M 1	B 4
市野吉則	川喜田涉	秋山洋亮
今浦善	鈴木志帆	阿部剛
齋藤文寛	関口由佳	大塚麻里絵
笹谷竜起	高橋祐二	兼森毅
佐野由有	谷知子	小向得あすか
城間さわ	中口裕太	佐藤美緒
中谷将	早川雄大	瀬長佑介
	船瀬瞳	田中理恵
	益子岳貴	宮崎高明
		宗像美優子
		吉本浩卓

i-lab

fab C. vol.4
2010年1月1日 発行

□編集
秋山洋亮 大塚麻里絵
兼森毅 田中理恵

□発行
伊藤香織都市計画研究室
東京理科大学理工学部建築学科
〒278-8510
千葉県野田市山崎2641
TEL 04-7123-4785 (研究室直通)
URL www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/

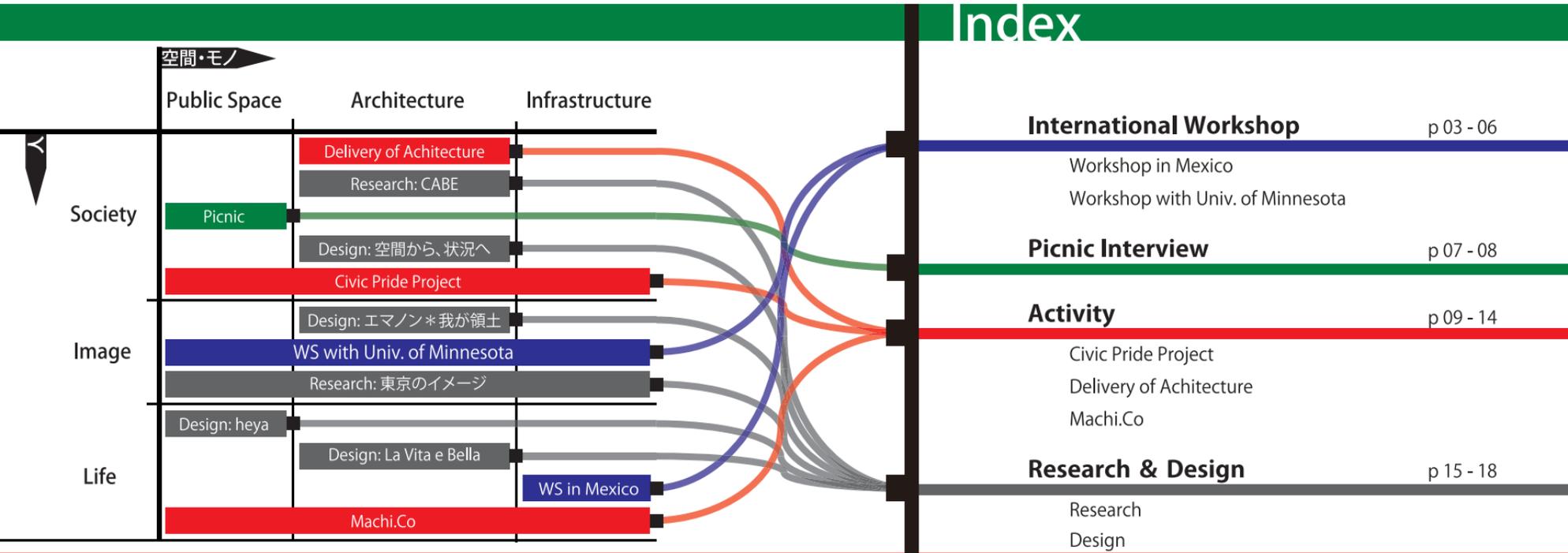
□印刷・製本
祥美印刷株式会社



fab C.

vol.4

都市人口は世界人口の半数に達し、さらに進んでいきます。人々の幸せな生活と持続可能な社会の実現のためには、都市がうまく機能していくようデザインする必要があります。本研究室は、分析を通して都市の性質を捉え、デザインを通して都市のあり方を提案します。対象は、都市圏のような広域スケールからベンチのような身近なスケールまで、インフラ整備のようなハード面から都市ブランディング戦略のようなソフト面まで、広範にわたります。
 vol.4ではそのような広範にわたる、伊藤香織准教授と研究室の学生27名の活動・研究・設計の中から、2009年の主要な事柄を紹介します。それらを分類して伊藤研究室の“興味”を下図に可視化しました。

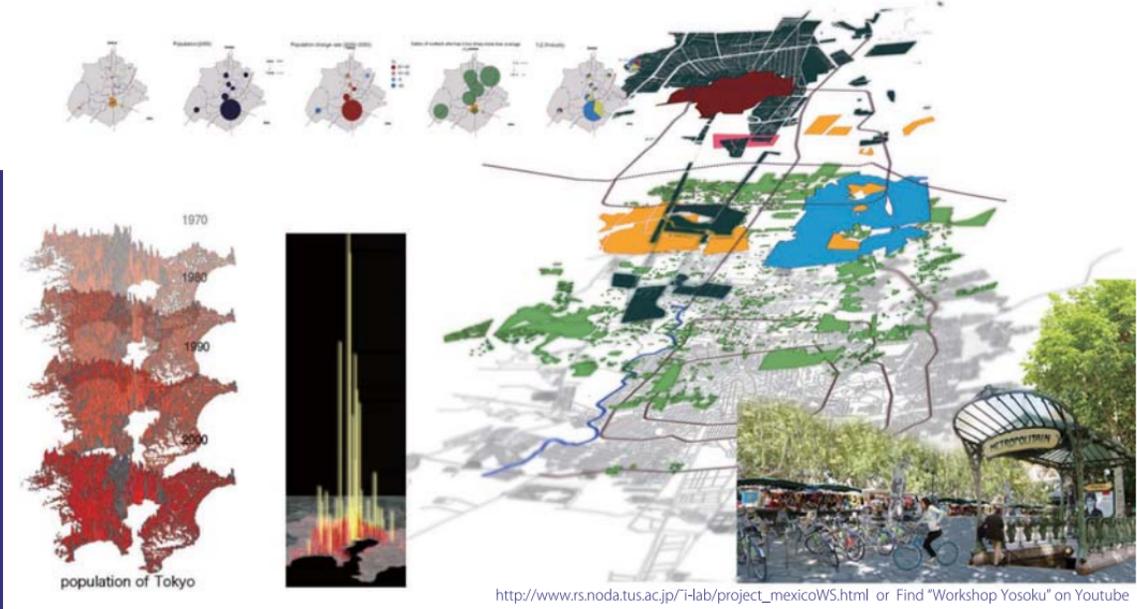


Japan-Mexico Joint Workshop Yosoku"Prospectivas de la Ciudad"

2009年9月、アグアスカリエンテス自治大学、千葉大学、東京理科大学、東京大学の共同ワークショップ「YOSOKU(予測)」が、メキシコ中西部の都市アグアスカリエンテスで行われました。伊藤研究室からはM1高橋、M2城間の大学院生2名が参加しました。ワークショップの一部は、総合地球環境学研究所「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト」プロジェクト※として行われました。

Workshopの概要

現在人口約110万人のアグアスカリエンテスは、今後人口増加が予想されています。増加人口を受け入れるためにどのように都市を拡張していくかによって、社会、経済、環境的な影響が異なります。ワークショップでは、日墨学生の混成で3グループが、「コンパクト」「スプレッド」「ポリセントリック」の3つのシナリオで都市の未来を考えました。都市の形態やインフラ、そこで営まれる生活などをデザインし、映像をつくって発表をしました。



http://www.rs.noda.tus.ac.jp/i-lab/project_mexicoWS.html or Find "Workshop Yosoku" on Youtube

※「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト」プロジェクト

世界的に都市の巨大化傾向が強まっている中、メガシティが持つ課題に対する解答を導き、新たな都市圏モデルを提案しようとするプロジェクトです。このプロジェクトでは、環境、社会、経済の各観点からグローバル、ナショナル、ローカルの各レベルで、長期歴史の変動と現状を視覚化し比較する方法を探りながら、メガシティの空間配置計画と将来のシナリオ予測をするものです。

修士一年
高橋祐二



まちあるき2日、そして作業時間3日間という怒濤のスケジュールの中、映像を用いたプレゼンテーションというのは、正直かなり過酷な作業で、発表日はふらふらになっていました。しかし、そこはラテンの国。陽気な現地の学生のパワーにも引張られてとても有意義な時間を過ごせました。

このワークショップは、「映像」という媒体でプレゼンテーションすることの意義を強く意識するキッカケとなりました。何を、どういう順序で見せることが大事だったのか。一枚のバースをどう見せたかをすれば、より生き生きと見せられたのか。ということを顧みることで、今まで何気なく目にしてきた映像、写真などに、自分が潜在的にどういった意識を積み重ねて、感覚となって出てきているのか。そういった今まで曖昧だった部分を自分の中で丁寧に拾い集めて物事を考えられるようになったと思います。



WorkShop with Univ. of Minnesota

2009年5月28日～6月6日の約2週間、ミネソタ大学の学生16人と建築家ブレイン・ブラウネル氏をむかえ、共同ワークショップが行われました。ミネソタ大学の学生と伊藤研究室の学生の混成で8グループを編成し、それぞれのグループが東京のある局面を切り取って、東京という都市を表現するショートムービーを作成しました。

Parsing TOKYO

A SHORT FILM PROJECT | Tokyo University of Science + University of Minnesota | May-June, 2009

「東京は、都市活動、都市構造、密度、空間配置など様々な局面で外国人に驚きをもたらします。複雑で多層性のある、とらえどころのないまちであるため、東京で活動する人々にとっても興味深いことです。この複雑で一見するとわかりづらい東京を、ある切り口から読み取り、表現します。」



ブレイン・ブラウネル

ミネソタ大学助教授。
建築家、サステイナブル建築のアドバイザー、シアトルのNBBJにおける建築素材の研究者。2006-2007年伊藤研究室に研究員として在籍。



ミネソタ大学の学生たちと記念撮影



発表風景

僕らチームは「Sound Of Tokyo」というコンセプトのもと、伊藤研3名ミネソタ大2名で約一か月間ひたすら「音」を追いかけました。“それぞれ実際に存在する音から、インスピレーションによる音まで様々な音を都市から抽出し表現する。そしてそれを一つの作品としてつなげていく”映像制作、国を超えての共同作業も全員初の試みだったのですが、言葉が拙いながらもお互いを理解し心を通わせ一つのものを作り上げたことで、それぞれが何か殻を破れたような経験になったのではないのでしょうか。

修士2年
市野吉則



発表後の打ち上げ

修士1年
鈴木志帆



私たちは音という観点から東京を捉えることで、都市の営みを見つめました。普段それだけに意識を集中させることの少ない音ですが、雑踏の中の一音一音からでも人々の生活や文化を具体的に抽出でき、都市の動きを追うことが出来ました。都市の音を見つめることで東京の興味深い一面や文化を改めて認識することが出来たように思います。また自分とは異なるものの見方に触れることで多くの刺激を受け、多角的な面から東京を捉えられたので、貴重な経験となりました。



都市の公共空間を使いこなし、人との交流の空間と時間をデザインする実践として、伊藤研究室では折に触れピクニックを行っています。ピクニック・インタビューでは、毎回ゲストを招き一緒に食事を楽しみながら、くつろいだ雰囲気の中でお話を伺っています。今回のゲストは、南米コロンビア出身の建築家、ホアン・パブロ・オルドネスさんです。



Q: デザインをする際、プライベートスペースとパブリックスペースの関係についてどのように考えていますか?例えばファサードは本来公共にも属すると思いますが、日本ではあまりパブリックとしてデザインされていないと思うのですが、A: そうですね、事実だと思います。プライベートとパブリックの考え方の違いがあるものだと思いますね。例えば、コロンビアとイギリスでは、プライベートの意味は自分のための空間という意味ですが、日本ではプライベートというのは家族まで含んだ空間を指しますよね。イギリスやコロンビアなどでは、他の人に対しての自分を印象づける部分としてファサードがかなり重要です。また、プライベートは自分の部屋だけ確保して、家族の共有空間については特にこだわりません。その意識の違いが日本と海外のデザインの仕方に強く影響を与えていますね。

私が思うのは、日本には中庭があるのですが、正面にあたる部分には何も考慮されていません。誰にも見られる事のない、とてもプライベートな庭を所有し、自分というのを外に出さない。このような状態は問題だと感じます。コロンビアの首都ボゴタでは、自分の敷地からいくらか土地を提供しなければならぬというルールがあります。その敷地は敷地を所有する人のためはもちろん、その周辺の街、都市の人々のために提供しなければならないのです。なので、敷地面積を100%使い切ることはできませんし、自然と公園道路のようなものができますね。

Q: 都市におけるパブリックスペースのデザインについて、運営組織や行政はどのように関与するべきでしょうか?
A: 日本にはプライベートとパブリックの間にある“スペース”がないと思います。コロンビアでは、その“スペース”に対して、何らかのポリシーがあります。例えば、アーバンファニチャーやバス停等のデザインに対してポリシーがハッキリしていて、それに基づいた規則によって、どの場所でも同じデザインを使うようになっています。それらのデザインが、パブリックとプライベートの間の“スペース”を形成しています。人々はそれらのデザインを楽しんでいて、それらは街の理解を補助するツールとして役立っています。一般に南米の社会では貧富の差がすごく大きくて、全ての人が平等に扱えるツールはパブリックスペースのデザインだけなのです。ですから、全ての人が使える道や歩道等の、プライベートとパブリックの境界である“スペース”はとても大事なのです。東京には、パブリックスペースを含んだプロジェクトが少ないですね。土地の値段が高いから、小さい広場もありません。

Q: ホアンさんはコロンビア・スコットランドなど様々な都市で建築設計をしてこられたと思いますが、東京で設計するときにはどのようなことに気を付けていますか?
A: 東京での設計は、法規的な面も含めて、とてもやりがいがありますよ。また、クライアントもデザインへのこだわりが強いですね。ただ、コロンビアの人はデザインに興味がないわけではなくて、東京に比べて社会的な問題がいくつもあり、例えば学校が無いから学校を設計する、全く機能なくなった家があるから、良い家を設計するなど、生活に必要な建物を設計することが多いです。東京ではそういった問題は解決されているので、より“個”を主張するようなデザインが求められますね。

また、コロンビアには無かった、資源を無駄にしないこと、緑を増やす等、たくさんの制限や規制があることが大変です。コロンビアにいた頃は、東京の建物がみんな同じ方向に屋根のような面ができていたのを見て、何でみんなピラミッドのような形を設計するのが不思議でしかなかったのですが、東京で仕事をはじめてみて、それが“斜線規制”によるものだと知ったときにはがっかりしましたね、笑

■ホアン・パブロ・オルドネス (Juan Pablo Ordóñez): 建築家
1968年コロンビア生まれ。1997年グラスゴー美術学校 (GSA) 建築修士課程修了。現在は有限会社コミュニティー・ハウジング建築設計事務所に所属し、名古屋Y邸 (2008)、C D S パナマ (2008)、田園調布4丁目の家 (2009) 等に携わる。



Q: 僕は建築学科の学生なのですが、都市デザイン・都市計画を専門的に扱っている研究室というところもあって、都市に興味を持っています。そんな僕らに最後にメッセージをお願いします。

A: 都市に興味を持っているのであれば、より都市を理解しなければなりません。そのためには、いろんなカタチのパブリックスペースを経験し、どんな時も、どんな場所でもパブリックスペースをより良くするためにどのようにすべきかを考えるべきだと思います。それは、大小問わず、どんなプロジェクトでも、常に都市に対してそのような姿勢を忘れないことが大切です。

ただ、そのような姿勢を東京という都市の中で見出すのは難しいですね。東京の建物は都市に対してとても美しい形態をしていますが、パブリックスペースに対する考慮、「誰かのために」というのが欠けています。そういった姿勢で挑むプロジェクトがこれから始まるというですね。もっと直接的なパブリックスペースへの姿勢をもったプロジェクト。それは、大きなプロジェクトだけでなくもいいのです。大胆さにはかけますが、小さなパブリックスペースをデザインするだけでも十分大きな意味を持ちます。

シビック プライド 研究会



シビックプライド研究会は、伊藤香織准教授と日本デザインセンターの紫牟田伸子氏を中心に、2006年から活動している研究会です。コミュニケーション、建築、都市再生、アート、ランドスケープなど産学の多彩な分野のメンバーが集まり、「シビックプライド(=都市に対する自負や愛着)」とコミュニケーション・デザインについて、調査・議論・文献講読等の研究活動を活発に行ってきました。ヨーロッパの事例調査を中心とした研究会の成果は、2008年11月に書籍『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』(宣伝会議刊)として出版されました。現在は、引き続き国内外の事例研究を行うとともに、日本の自治体等への提案と調査も手がけています。伊藤研究室からは、伊藤桃子、井上美奈(2006年3月~2008年3月)、仲村明代(2007年2月~)、佐野由有、城間さわ(2008年3月~)、鈴木志帆、谷知子、船瀬瞳(2009年4月~)等が研究会に参加し、調査等の活動を担っています。

Portland, Oregon, USA

Birmingham, UK



Münster, Germany



Communication Points Survey at Kitanenju

2009年には、北千住をフィールドに、足立区のコミュニケーションポイント調査を行いました。都市づくりの意志やまちで起こっている魅力的な出来事を、住民や来街者に伝え、共有するために、まちなかに点在するコミュニケーションポイントはどの程度活用されているのか、また無意識に発せられているメッセージもあるのではないか、という疑問から始まった調査です。看板、ポスター、マップなどを中心にプレ調査を行い、引き続き調査分析を進めています。



建築のデリバリー

建築プロジェクトなどが実現することを、英語で“deliver”ということがあります。“竣工”のような作り手の論理ではなく、明確に使い手を見据えた動詞です。日本建築学会『建築雑誌』2009年10月号で、伊藤准教授が「建築のデリバリー」という特集をまとめました。この特集では、完成までのプロセスの中で建築を“届けること=デリバリー”が取り上げられています。伊藤研究室では、近年の日本における公共的な建築作品を中心にデリバリーのデザインという視点から見直して方法論を整理する作業を行いました(右図)。

Gateshead Millenium Bridge on 20 November 2000

photo:ilijim



英国ニューカッスル/ゲイツヘッドの両都市を結ぶ歩行者橋は、まるごと巨大クレーン船で吊られてまちに運ばれてきた。多くの市民が見守るなか、この橋は文字通り市民とまちに「届け」られた。

施主＝使い手である住宅の場合、使い手と作り手との密接なコミュニケーションがあり、一連のプロセスを通して建築は使い手に届けられ使い手のものとして獲得されていきます。一方、より公共的な建築の場合、オープンしてから時間をかけて使い手のものとして獲得されていくのが一般的です。しかし、真に「人々に生かされる建築」になるためには、建築が実現していく期待と発見に満ちたプロセスの中でデリバリーがデザインされることが重要です。特集では、4つの事例が紹介され、一部の取材には、伊藤研究室の学生も同行しました。

1. 座・高円寺 : 区民や子どもたちに/公共劇場を届ける/プレオープニング・プログラム
2. 高崎市立桜山小学校 : 子どもたちや教員に/学校を届ける/ワークショップ
3. 柏の葉アーバンデザインセンター : 多様なステークホルダーに/まちを届ける/アーバンデザインセンター
4. 今治みなと再生 : 市民と各地の仲間に/港を届ける/施工のプロセス

Media of Delivery

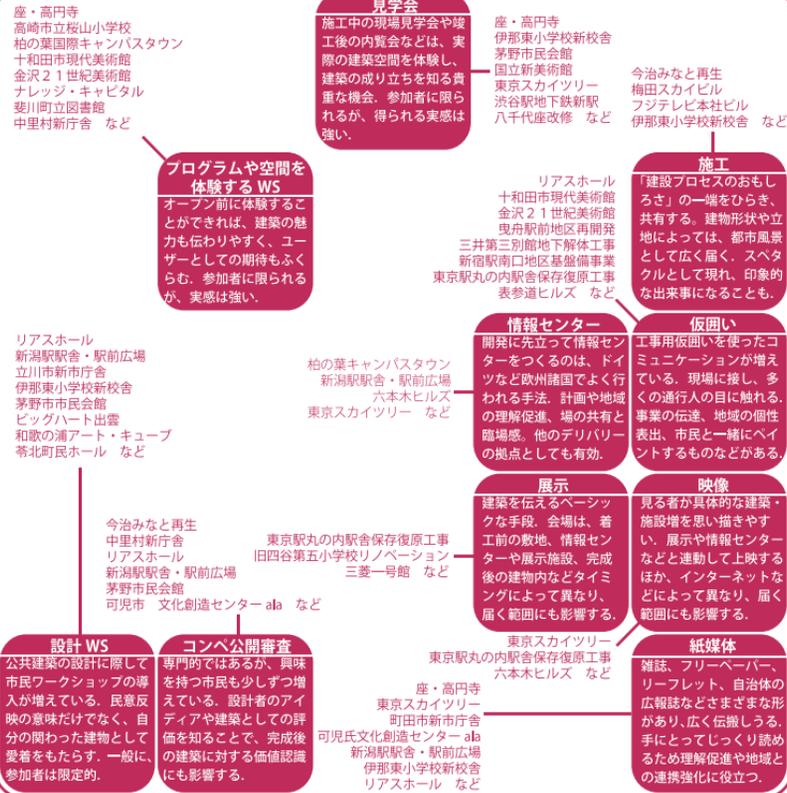
Activity

DELIVERY OF ARCHITECTURE

広範に届ける

ピンポイントに届ける

体験として受け取る



知識として受け取る



Machi.Coとは

Machi.Coは、まち歩きワークショップを通じてまちの見方を提案する学生団体です。伊藤研の有志が中心となって企画・運営し、実際にまち歩きワークショップを行っています。まちの見方を提案してまち歩きをすることで、まちに興味を持ってもらうことがねらいです。



雑司ヶ谷「地形」

大勢の若者が集まる繁華街として知られる池袋に対して、その脇で静かに落ち着き払った様子で腰を据える雑司ヶ谷。かつて流れていた川の跡や神田川が削った崖など、バリエーション豊かな地形が見どころです。今ではビルが建ち並び気づきにくくなっていますが、東京は起伏に富んだ都市なので、普段あまり気にも留めない地形に着目してのまち歩き。南側の斜面に立つと目の前に広がる東京の景色はまち歩きの疲れも癒してくれます。



まち歩きに際しては、コンセプトがよくわかるようにコンセプトマップを持ってまちを歩きます。第2回まち歩きの雑司ヶ谷では、コンセプトである「地形」を視覚的に把握できるよう標高ごとに色を変え、地図と地形がリンクするようなコンセプトマップを作成しました。

Machi.Coでは毎回コンセプトを設定し、そのコンセプトに沿ってまち歩きをしています。

第1回目の谷中は「リノベーション」

第2回目の雑司ヶ谷は「地形」

第3回目の佃・月島・晴海は「疎・密」

ある視点からまちを切り出して見てみると、何気なく歩くよりもたくさんのが見えてきます。

Website <http://machiconomachiaruki.web.fc2.com/>

まちこのまち歩き@千駄木空間 2009年11月17~22日

記念すべき第1回まち歩きが行われた谷中で、Machi.Co初の展覧会を開きました。

ふらっと立ち寄ってくれる人など知らない人との交流も多く、より多くの人にまち歩きの魅力を伝える良い機会となりました。



第1回
谷中



第2回
雑司ヶ谷



第3回
佃・月島・晴海

英国建築都市環境委員会 (CABE) によるデザインレビューについての一考察
- シティ・オブ・ロンドンの事例を通して -

井上 美奈

英国政府は建築・都市環境の質の向上を目指し、1999年英国建築都市環境委員会(CABE)を設立した。その主要なサービスであるデザインレビュー(DR)は、国内の重要プロジェクトに実践的なアドバイスを提供している。本研究ではこのCABEのDRに着目し、運用の仕組みと実態を明らかにする。その際、DRの課題点である実効性の確保と、良質な空間形成に向けての客観的なアドバイスのあり方、また、地方自治体でなく国がDRを行う意義と特徴に着目し、今後のDR制度の構築と活用、国としての関わり方を模索する為の有用な知見を得ることを目的とする。

関連文書と関係者ヒアリング、DRの傍聴から、組織およびDRの仕組みと法的な位置づけを整理し、シティ・オブ・ロンドンの19件のプロジェクトをケーススタディに、DRの運用の実態と実効性を明らかにした。考察の結果、次のような知見を得た。



出典「How to Design Review」

①DRの実効性:

DRはアドバイスであるが、ケーススタディから、地方自治体が計画許可を下す際に争点となる内容については変更に応じていた。また、地方自治体において重要な計画はDRを行うよう指導することで、英国の計画許可の仕組み全体の中で実効性を確保している。

②客観的なアドバイスのあり方:

DRには多様な専門分野のパネルが参加し、その内容は計画の課題点の抽出に焦点が絞られ、具体的な解決方法は計画チームや建築家自身に委ねられる。

③国がDRをする意義:

出版やリサーチ活動と密接に結びつく事で、建築・都市環境の「質」の向上を図る上での教材としての役割を担っている。

ゾーニング制の都市計画である日本にこの仕組みをそのまま援用することは難しいが、都市計画制度全体を含めた仕組みづくりの中でDRを活用し、その実効性を確保しようとするあり方には可能性がある。

日本都市計画学会『都市計画論文集』
No. 44 -1, pp.68-74, 2009

東京のイメージ

- マスイメージと私的イメージから見るまちの多様性に関する研究 -

仲村 明代

東京には様々なイメージが潜んでいる。本研究は、人々が抱いているまちのイメージをすくい出し、繊細な「東京のイメージ」の諸相を描き出し、その特徴や傾向を考察するものである。

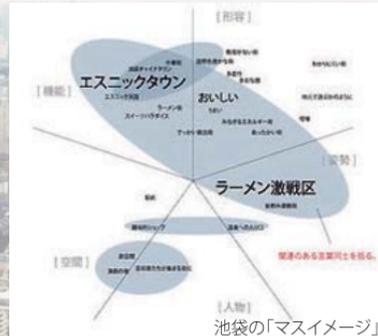
マスメディアが対象に向けて発信するイメージ(マスイメージ)と、個人がそれぞれまちに対して抱いているイメージ(私的イメージ)に着目する。さらに私的イメージは、あるまちについて一般に浸透していると個人が考える「一般イメージ」と自分自身のまちの体験によって得た「個人イメージ」とに分けられる。

調査・分析は次の手順で行う。

- ①雑誌5誌のまち情報記事から店舗や施設等の実空間情報を抽出、GISを用いて分布や量を視覚化
- ②同記事から「マスイメージ」を表す言葉を抽出
- ③アンケートにより「一般イメージ」「個人イメージ」を表す言葉を収集
- ④3種のイメージについて比較分析

雑誌上の実空間情報は、food、service、goods、space、culture のジャンルに分け地図上にプロットすることで、雑誌で取り上げられるエリアの傾向を視覚化した。3つのイメージについては、それぞれのイメージを表す言葉を分類し、エリアごとに図化してその特徴を前述の実空間情報との関連において考察した。

ここでは袋袋の例を示す(図)。実空間情報としてはfoodが最も多く発信されており、それに対応してマスイメージとして「おいしい、エスニックな」等が多く得られた。他方、一般イメージや個人イメージでは、foodに関する具体的なイメージは少なく、「繁華街」等より抽象的に捉えられている。このイメージに関連する「にぎやかな、便利な」等の感情や「若者の町、庶民的」等の人物像等、個人の体験に基づくと考えられるイメージ構造が見て取れる。同様に18エリアについて比較分析を行い、全体としての「東京のイメージ」を考察した。



2008年度 修士論文
トウキョウ建築コレクション2009 全国修士論文展 出展

2008年度 修士論文

- 『屋外空間におけるパブリックライフとしての対滞留行動
- 行動の要因と実態に着目して -』
篠崎 哲平
- 『東京のマスイメージ
- マスイメージと私的イメージから見るまちの多様性に関する研究 -』
仲村 明代
- 『生活の定着過程における都市の使いこなしの分析
- 米国オレゴン州ポートランド都心部を対象として -』
平川 聡

2008年度 卒業論文 通年

- 『若者の出店を契機とした地方都市
- 商店街の再生
新潟市上古町商店街の調査・分析 -』
坂下 拓弥 / 益子 岳貴 / 高橋 祐二
- 『大学キャンパスにおけるサイン計
- 計画の取り組
画の有効性
みとサインの使われ方に着目して -』
白井 菜子 / 芳賀 慎二 / 本田 元

2009年度 卒業論文 半期

- 『スタジアム立地と周辺都市空間での人々の動きに関する研究
- リーグベガルタ仙台ホームスタジアムのケーススタディ -』
宮崎 高明 / 宗像 美優子
- 『坂道空間のシークエンスに関する研究
- 視野占有率と心理量による分析 -』
兼森 毅 / 田中 理恵 / 吉本 浩卓
- 『屋外空間形状がコミュニケーション行動に及ぼす影響
- 墨田区京島を事例にして -』
秋山 洋亮 / 瀬長 佑介



エマノン*我が領土

～アフリカの面からアール・ブリュットの参照、ドロ잉の末に～

尾上永晃

2008年度修士設計

どんなに考えても結局様式にはまらず、どうやっても説明できてしまうほど、建築の語彙が豊かになっていく。そこから抜け出さんと、訳のわからない・けれども気になるものを作りたいと思った。結果、偏執的ドロ잉と形態の抜き出し、なんとなく良いものの構築を繰り返して、わりかしわからないものが出来た。修士設計は自分のスタンスの見極め所だと思う。



La Vita è Bella

篠田尚紀

2008年度修士設計

階段室の立ち上がる部屋を用いて「都市」と「家」という二つの相反するもの間を段階的に繋いだ。ナマに立ち上がる階段室は視線を緩やかに遮りながらも全ての場所を繋いでゆく。単なる共用空間ではなく、外部と生活空間が揺れ動く曖昧な場所である。この曖昧さが空間に絶えず変化をもたらし、居住者や周辺住民のアクティビティを喚起する。



空間から、状況へ

～2015 : A Prototype For Work Life～

竹川 征

2008年度修士設計

従来通りに空間の質を問うのではなく、新たに「時間」「人間」「情報」といった諸要素を積極的に織り込み、素材とそのディテールにこだわりを持ちリアリティを追求した。すべての要素が揃うことで、15人のアーキテクトたちが共同体の記憶を刻んでいく様々な[状況]を、個性豊かに創出していただく。2015年を目標に情熱を持って思考体系を熟成させたい。



heya

船瀬 瞳

2008年度卒業設計

都市には用途が決まりきった場所が多く存在し「〇〇をする場所」となっている。人々が自由に過ごす事が出来る場所、都市内での人々の居場所を提案する。敷地は、東急東横線渋谷駅から代官山駅の線路跡地。この場所に、「heya」をつくる。「部屋」よりももっと曖昧な存在である。「〇〇をする部屋」ではなく「〇〇がしたくなるようなheya」である。

第21回千葉県建築学生賞展奨励賞(2009)



2008年度卒業設計

富士見再考計画
川喜田渉



芸術家屋
鈴木志帆



創り上げる個性
拡がる個性
関口由佳



あるく建築
谷知子



凸凹した床の
集合住宅
中口裕太

日常を喚起するもの
木村智裕